

文芸部覚え書

水野 富美子

東洋英和校友会は、昭和3年に創設され、修養部・体育部と共に文芸部も設置された。大貫広子・鶴来文子・今村寿々代3部長の時代を経て、私が其の後を継いだ。文芸部の仕事は、学芸会・講演会・映画会・校友会誌「楓」^{註1}の発行に当たる事だった。鶴来教師は文芸部の基礎を築いた点で、^{註2}今村教師は学校新築の大事業達成の一助として、大文芸会を催され、大いに貢献された点で、ここに特筆しておきたい。

鶴来部長時代も、同じ国語科教師として机を並べていたので「楓」編集・学芸会等は常に一諸にして来たが、私が部の責任者となってからの新しい企画などにつき少し記して見たい。

1. 学芸会の内容にその時期に応じた特性を持たす。

- イ. 5月の学芸会………修学旅行の報告
- ロ. 10月頃の学芸会………従来通り各科で習得したもの発表
- ハ. 3月の学芸会………雛祭りを兼ね5年生の送別学芸会（詳細は後述）

2. T・Eニュース発行

年1回発行の「楓」では、校内のニュースの時期を失する場合もあるので、T・Eニュースを出すことにした。所謂学校新聞で、学校の出来事、先生方からのお話などを載せた、一面文の謄写版刷りの極めて粗末な物だったが、これには事務の松井さんが大いに協力し



館れい子先生追悼茶会

て下さり、今、流行の手作りの楽しい物であったと思う。一枚も残って居ないのが残念だ。これは後に10年12月、東洋英和ニュース発刊に伴い、発展的に中止した。

3. 新聞切抜掲示板

折に触れ生徒に訊いて見るに、新聞など読まないというのが大方のようであった。新聞に親しむにはどうしたらよいか、若い人達にも関わりのある、興味あるような記事を切り抜いて、皆の必ず通る、目につき易い所に掲示しておいたら、大見出し位は目に止まるだろうと思い、「その日のニュースは朝の中に」をモットーとして、松田先生（公民）のご助力を頂いて、講堂外側の廊下に面した所のグリーンポールドにはる事とした。ここは朝の礼拝の時、全生徒の通る道であったから。文芸部委員は当番をきめ、少々早く登校して図書室^{註3}に行き、松田・水野が赤線で囲っておい

た記事を切抜き、所定のボードに貼っておく。然し、之れは余り効果があったとは申せず、立止まってじっくり読む生徒は少なかったが、見出し位は目に止まり、追々新聞に興味を持つようになるであろうから、それでよいと思った。

4. 雛祭り学芸会

女学校であるから、雛人形一揃位はあってもと思い、文学部費を節約し、少し基金も出来たので、長野先生にお願いして校友会費より補助して頂き雛人形を求めることにした。鶴沼・柴田・中木諸先生方にご一諸して頂き、何軒も雛の店を歩き、繰返し検討したので面といい、衣裳といい誠に満足のいく品で、皆さんに喜んで頂けた事は幸せであった。雛祭り学芸会が近づくと、委員達は放課後、中2階の文芸部準備室から雛の箱をおろし「敬神奉仕」の額の「奉仕」の方の下に飾った。途端に講堂の中が今迄になく華いで、この雛の前です、学芸会の事を想うのであった。もう間もなくこの学び舎を去る5年生とのお別れの会でもあるので、いつしかプログラムとはこと変わり、仕舞・長唄・ダンスなど和かな日本の雰囲気の漂う会であった。卒業の方達からも劇などのお礼的出演もあったが、1年から5年生までの中で長唄の出来る方達が集まり、制服の膝に三味線を抱えたり、唄方は見台を前にして大きな口を開き、日頃の音楽の時間なら叱られる様な地声を張り上げ、大喝采であった事は今に忘れられない一幕であった。

5. 七夕祭り

今村部長時代「星の夕」として、夜、屋上で七夕の催しがあったが、新しく正面玄関のショウケースに七夕の装飾をしたり、各教室室には文芸部委員考案の装飾をし、中庭には

各学年毎に1本の太い竹を立て、これに習字科の延長として全生徒の認めた、色紙、短冊、網、提灯、輪つなぎ其の他思い思いの趣向を凝らした美しいものを吊し、学年毎に妍を競って、時ならぬ花を夕闇の中庭に咲かせ、皆の目を楽しませた。

6. 昼食後の休み時間のニュース映画

定期的の「劇映画」以外に、13年度から月1回、その折々に相応しい短編映画やニュースを講堂でして、自由に観るようにした。この他学芸会で「今と昔奥の細道」などいって、一茶・西行・芭蕉・良寛・現代女学生に扮し、司会者によって、奥州の旅を座談会風に表現したのなど、今は何でも座談会ばやりであるが、当時は珍しくて斬新とお褒め頂いたり、又、学芸会という何となく特定の生徒が出るようになるのは、止むを得ないことだが一度クラス全員を壇上に並ばせてあげたくてギンギンと並ばせ、国文鑒(当時の国語教科書)を皆が持って、「落花の雪にふみ迷う…」と朗々と読み上げた時の、皆の緊張した誇らしげな面持ちが今に忘れられない思い出である。

又「楓」に先生への親近生の一纏として全先生から幼少時代とか、尊敬する人物、その他の玉稿を頂いたりしたが、段々時局もむつかしくなり、何も彼も思うだけで出来ない時代になってしまった。

計画して出来なかったこと

1. 能・仕舞など純粋な日本の伝統芸術を、案外実際に見て居ない。何とか全生徒に在学中一度でよいから、実際を観せたいというのが、私のかねてからの望みであった。尤も国語科の仕事として、早くから観世流の「学生観賞能」の会に入会して居たので、年に1回位、

5年生の中から希望者だけを、大曲の観世舞台に連れて行っては居たが、極く限られた人数であり、大半は「見ず嫌い」で終わってしまう。国文鑑には「萩大名」「末広がり」「天羽衣」「鉢ノ木」など載って居て、その度に、黒板に能舞台を図で書き、仕方話で真似して見せても、實際をまのあたり見なければ能の持つ幽玄の世界は判らない。色々考え、出来るかどうか当って砕けるつもりで、自分の考を喜多流宗家の六平太先生に、手紙で書き送らせて頂いた。今考えると随分大胆な話で失礼の事だが、心が凝れば怖れも去るのか、其の時はそれが出来た。喜多流を選んだのは六平太先生の次男でいらっしゃる、實先生が若年層にはこの伝統芸能を普及させようと、懸命になっていらっしゃることを聞き知って居たからである。お逢い下さるといので、たしか四谷だった舞台に實先生をお訪ねし、よくお話したら学校の講堂を見分に行くとおっしゃって下さった。併しいらして講堂の壇上を色々調べられた結果、矢張り無理だと判り実現は出来なかった。

2. 学芸会などでも使い、又、お芝居・踊りの会などで聴く擬音や裏方さん達の仕事など、知っておくのもよいと思い、一座方と当たった結果、現在ではその道の最高の方達が、喜んで引受けて下さるといので、一座ご許可を頂きたいとお願ひしたが、そういう関係の方を、この学校に入れることは出来ないと許されなかった。残念だった。

文芸部主催の課外稽古事

1. 活花稽古

いずれは卒業して活花の稽古をしますので、在学中に下地を作っておいたら、と思ひ長野先生のご賛同を得て計画を建てた。

先生は、^{註4}福井草染氏^{大正}(英和¹3年卒)上田朝先生とご同級で紹介して頂いた。

流儀は草月流、当時草月流は今程、活花界で高い位置を占めては居なかったが、古い他の流儀よりも、新しい感覚のお花で若い人達には一番相応しい流儀ではないかと思ひ、これを選んだ。家元の蒼風先生のお宅にご挨拶に行ったら、勅使河原先生は気軽に玄関に出て来られて、学校の課外として草月流を取り上げて頂いて嬉しい、とお礼をおっしゃって下さった。隔世の感がある。

教室は水の便もあるので、習字科教室とした。日時は水・金の2日、放課後。

会員は4年生・5年生に募ったが、当初の予想に反し100名近い申込みがあり、尚、小学部に属していた別科からも希望者があって入会したり、師範科の生徒にも希望者があったので、本当によい事をしたと思つた。生徒の終わった後は、先生方もかなりの数の方がお稽古に励まれた。

規程は2ケ年で盛花と投入れは終り、希望者には初伝と中伝の免状を渡す。尚、14年3月、初伝免状30人、中伝免状17人が頂き、中伝の人は夫々家元より雅号をつけて頂いた。この中から卒業後続いて研鑽を続けて福岡県の他の地方にて活花教師として活躍している方のあることは嬉しい事である。

会の名称を和香会と言う。これは13年11月家元がつけて下さったものである。

卒業展覧会、卒業する会員の作品は、習字教室に飾り、卒業式当日一般の観覧に供した。

お道具は余り求められず、わらび手の鉢は各自に求めて貰ひ、盛花用の白い水盤と、投入れ用の籠を共用として習字室に揃えておいた。

お月謝 各自の花代（毎回同金額になるより花屋さんときめておく）と先生へのお礼のため、月謝を集めた。さてこの額が私の記憶から消えて了い、洵に申訳ない。お茶の方も同様である。その頃の卒業生に訊いて見たが、駄目であった。

2. 茶の湯

12年度から始めた活花の方が、1年たって軌道にのり、順調に進んでいるので、かねての望み通り茶の湯も入れたいと思い、計画を建てた。そして昭和13年6月より始める事が出来た。先生は渡辺宗星氏、館れい子先生（作法・料理）が永く師事していらした先生。宮家関係の方にお弟子さんが多くお忙がしい中を、館先生ご紹介で快諾して下さいました。そうお若いとは申せぬのに、一度のお休みもなく、鎌倉からいらして下さい、初心者懇切に教えて下さった。

流儀は裏千家（先生は今日庵の直弟子でいらした）

教室は作法室、日時は金曜日放課後。

会員 活花と違い茶の湯は、まだ少女という年令の生徒達の事故、幾人も希望者はないと思っただが、10数名はあってよかったと思っただ。しかも嬉しいことに、この方にもスペシャルクラスから、2人入会した事と、生徒の後でする先生方の組に、ピアノ科の先生の、ミス・クワリが弟子入りして下さいました事である。生徒達は当り前のことで坐る事は苦手であるから、お手前の番が廻るまで、畳でない所で腰かけて待っている事にし、お釜は五個揃えたので5人づつお手前をした。赤い袱紗は銘々に求めて貰ったが、それを制服のスカートに挟み、神妙な顔をして袱紗さばきをしたり、「お話めは？」「初昔」などと言って

るのを見るのは、とても微笑ましく又楽しい風景であった。了度、お八つのほしい頃で、甘い物の頂けるのも彼女達には魅力であったらしい。“ホントハコレガネライヨ、”なんてヒソヒソ話が耳に入ったこともあった。ミス・クワリは殊に坐る事が苦しいでしょうと、随分気を使ったが、よくきちんと正座し、一懸命、日本の作法を身につけようと務めていらっしやるお姿が印象的だった。

お道具 活花と違いこちらは高価で中々色々揃えられなかった。やっと5人並んでお点前が出来るよう、お釜からお薄の道具を先づ揃え、校友会から、返金を約して融通して頂き、お濃茶・炭手前・盆 など少しづつ揃えていった。こうして皆が段々と上達して、楽しみにして居たが、戦争の様相が次第に苛烈になり、到頭、入れていた菓子やが製造を中止してしまった。これには困って方々当たって見たところ、全く縁も由縁もない竹谷町（現南麻布1町目）の小さな菓子やさんが、私の窮地を救ってくれた。それで少し寿命がのびたが、16年、当局の指示により、校友会を解消して報国団となり戦時下の体制になったので、お花もお茶もこれらはすべて自然的に終らざるを得なかった。然し、戦が終わって再び日本に平和が戻った時、東洋英和では春3月、雛が飾られ、習字室ではお花の稽古が始まったという。それを聞いて本当に嬉しかった。誰方のお心であったのか？私には見えない大きなものに感謝の気持で一杯である。

(註1) 校友会誌ハ3号マデデ4号ヨリ楓ト改ム

(註2) 50年誌P. 144～P. 152

(註3) コノ仕事ニハ図書館ヲ借リスルノデ中木先生ノゴ協力ヲ頂イタ

(註4) 楓第8号P. 123～P. 124先生の「いけ花雑誌」

文芸会の思い出

岡本幸江(昭和11年卒)

古い文芸会プログラムの中に「作文朗読・大多和幸江」というのがあったから、その頃のことを書け、という御命令である。たぶんそれは女学校2年で、伊香保修学旅行のことを書いたものだと思う。竹藪だか雑木林だかの中を歩く時、足が滑って落葉を踏みのけ、下から黒い土が顔を出したという処で「よく肥ったよい土でした」と読むと聴衆(!)が一斉に笑ったのを憶えている。ところでこの作文朗読は二度行なわれ、二度とも皆が笑ったのである。私が2年の時だから昭和7年、校舎は古い木造校舎だった筈であるが、新校舎建築の準備で取り壊しも始まっていたのかもしれない、あれはいったい何処で読んだのだろう。建築資金はカナダミッションの御厚意を仰いだものの、自分達も出来るだけの事はしようというわけで、毎年、青山の日本青年会館を借りて聖劇を主とした文芸会を催し、家族縁者が切符を買って盛大に見に来ていたが、ひょっとして二度めはそこで読んだのだろうか、どちらも全く記憶に無い。

自分の事ではないが二度あったことを憶えているのに英会話がある。髪を後で一つに束ねた小柄な1年生であった。大きな箱を持って出て来て、「This is a box」から始めて「Please see the top of this box……Please see the bottom of this box……」などと続き、おしまいで「This box is mine」と結ぶと、そこでもみんなが笑ったのである。二度とも。この1年生は小学科からの進学者ではなかった。何故そんなことを私が知っていたのかは、わからないが、「始めて英語を習ったのにこ

んなに皆の前でしゃべって偉いな」というような感想を持ったのだろう。

新しい校舎が建って創立50年のお祝い行事の中にも文芸会があった。この時は卒業生であられる東久邇宮妃殿下がおいでになり、大講堂のまん中の通路にテーブルと椅子を置いてお迎えした。テーブルには白布が掛けてあったような気がするがよくわからない。椅子の坐席にクッションがあったのかどうかもわからない。妃殿下は始終背筋をまっすぐにのびし膝に手を置いて端然と舞台を御覧になり、おきれいで結い上げた髪にも着付けにも一分の乱れもなく、私は大いに感銘を深くした。のちのち生徒が行儀悪いのを叱るのにしばしば「皇族のお行儀」を引き合いに出したのはこのへんに起源があるようだ。

あと自分の事でおぼえているのは1つは岡本綺堂の「修善寺物語」を役割分担で放送劇風に読んだこと。指導は鶴沼先生で女学校4年か5年の事だから大講堂で行なわれたのが、これも何故か二度あった。私は一度めは地の文を読んだのだが、二度めは誰かが出られなくなって、たしか夜叉王の役を読まされたように思う。鶴沼先生に「大多和さんに読んでもらいましょう」と言われて私も仰天したが、クラスの皆も意外な様子であった。その頃私は地の文の読み手に決っているみたいなのところがあったから。だからこの二度めは大いに緊張した。ところであの1年生の英会話はこの二度の時だったかもしれないと思う。一度めは生徒だけで二度めはお客様をお迎えして、というような事でもあったのだろうか。

自分の出演した記憶のもう一つは原稿持たずのお話をした事で、これは途中で話の続きが出て来なくなり、演壇で立往生して真赤になった思い出がある。

もう一つは英語劇に出たこと。指導はミス・キニーで、内容は蠟燭作りがイエス様を迎えることにのみ熱中して蠟燭を必要とする人々の頼みをきかなかつたので神様に叱られる話。

もう一つ、自分が出ないが同級生の一つのグループが「細川ガラシャ夫人」を本式の衣裳を借りて来て大々的に上演したことがある。これは演じる方も見る方も大騒ぎであった。それからリビングストンの伝記から作った劇（脚本はきっと今村先生だと思いが）もあって、この時は高峰三枝子さんがリビングストーンに扮して舞台中央に坐っていたのだった。

50年のお祝いの時は5年生が英和の歴史を劇で見せた。ミスカーメメルもたしかそれらしい服装で出てきたと思う。畳敷きの舞台装置で迫害が激しかった頃の場面、生徒が多く賑やかだった頃の場面など今でも眼に残っている。制作、指導は今村先生である。尤も5年生のことだから制作の段階で生徒の意見やアイデアが取り入れられた処もあったのかどうか、御存じの方があれば伺ってみたい。

これら文芸会の、半分以上を私の母は見に来ていた。女学科生徒の総数は350名～380名位であったから保護者の席もまずまず充分にあったわけで、文芸会はいつでも保護者を招待したのだろうか、勿論これは新校舎、つまり現在のマーガレットクレグ記念講堂が出来てからの話である。進学で目の色を変える必要もなかったし、カナダミッションの援助に頼って学校経営は行なわれていたし、かなり自由で楽しい時代だったのではなからうか。今村先生には1年か2年の時お習し、

何の授業だったかわからないが「疲れた時には体を伸ばして眠るのが最上の恢復法。条件が揃えば入浴も効果的」というお話を聞いたおぼえがある。音楽や英語も教えて居られたのではないかと思うが、当時の私の認識としては、今村先生は劇の指導をなさる先生であった。そしてその劇は聖劇であって、前述の通り校舎建築の一助に日本青年会館で保護者に入場券を買って貰って行なったものであった。

私は小学科5.6年を寄宿舎に入れていただいて過したばかりに、上級生の聖劇にも関わりを持った。子役に使われたからである。殉教者ステパノという題で5年生の土肥さんがステパノ、4年生の大久保さんがパウロで、私は4年生の加藤さんの子供役であった。小学科5年の時で、弟役に1年の高梨珠子ちゃんが出ていた。セリフは「小父ちゃん、小父ちゃん歌をうたってちょうだいな。」と言う程度のものであったが、この最後の場面で土肥さんが膝をついて両手を高く挙げ、天を仰いで人々の為に神にとりなしをしつつ倒れて行く様子、大久保さんの「おお、これは聖者の死だ。ああ俺のした事は！俺のした事は！！」という悲痛の絶叫などは、今もまざまざと憶えている。

そのついでによく憶えている事がある。この劇の練習は土曜日を使って一生懸命やっていたのだと思うが、その中のある日に揉めごとがあったらしいのである。今村先生もいらっシャって、4年生の方々が涙声にもなりながら先生に何か訴えて居られる。土肥さんは少し離れて立って居られ、今村先生が「あなたは皆さんが練習していらっシャるのを御存じなかったの？」とおききになると、たいそうきっぱりと、「存じて居りました。」と答えられた。私の記憶はそこでぶつりと切れるのだが、その時感じた女学科の上級生への、まったく手の届かない大人なのだという思い、就中、

子供の目にも四面楚歌の様に見えた土肥さんの、毅然とした言葉遣いに深い畏敬の念を抱いたことが懐しい思い出になっているのである。

次の年（だと思いが）は、福井美代子さんのサラ、井上千代子さんのアブラハムでイサクの生費を主題にした劇であった。イサクは一度めは石井靖子さん、女学校2年だったと思う。二度めは小学校1年か2年位のスクリバ・エミーさんだった。それで、一度めはアブラハムがイサクを抱くのが重そうだったのに、二度めは実に軽々と抱いて居られた。この劇では「みんな有難う、有難う。僕今日八つになりました……」というイサクのセリフが耳に残っている。

なおスクリバさんは、同じ時かどうかはわからないが小学科の劇にも出て悪役の蛇か何かを扮し、

毒を飲まされて、「うーん こりゃ五臓六腑がひっくり返る！」と苦しがる演技が実に上手で感服した。井上さんはベテロにも扮したことがあると思うし、福井さんもサラだけではなかったと思うのだが、どうしてもよくわからなくなってしまった。情報も娯楽も少ない時代ではあり、文芸会は学校生活の大きな行事であり楽しみであった。（尤も、運動会も遠足も、大きな楽しみだったし、後に始まったバスケットボールの試合も随分湧いたものだったが。）よその学校では学芸会と言うのに英和では文芸会と呼ぶことの意味についても、伺った事はある様な気がするがもうみんな忘れてしまった。なかなか書き記してきたことについても記憶がいが沢山あることと思う。大方の御叱正を願う次第である。

文 芸 会 の 思 い 出

山 東 初 子（昭和11年卒）

私のように幼稚園、小学校、女学校と13年間も、人生の中で大切な時を、お世話になった東洋英和は、何にもかえがたい程懐しい所である。その幾多の楽しい思い出の中で、あのムードのあった昔の木造の校舎が現在の鉄骨のビルに建て変わる時、募金の一部に当てるための有料の文芸会が催されたのが、何時思い出してもほろゝえましく楽しい。当時小学生だった私達は、今思えば流行の先端だったかも知れない子供オペレッタとでもいうべき物を、又女学校のお姉様方はキリスト教の学校らしい聖劇を上演した。聖劇の主役をなさった方々の中で、ベテロを演じられた三上さん（旧姓）ステバノの土肥さん、（旧姓）現在東光会会員の上野美代子さん等の大変お上手な演技は今でも私の眼に残っている。私達小学生の出し物「ド

ンブラコ」は山田耕作々曲、北原白秋作詩という大物ぞろいの作品であった。大分前の東光会誌に、「大きな童女」という題で追悼文をかゝせていたといた今村寿々代先生の演出で、私は小学校4年の時ドンブラコの中で桃太郎をやらせていただいた。募金のための劇であるから経費も険約と、あらゆる衣裳、小道具は、今村先生の御指導の下で師範科（現在の短大保育科）の方々が、よろい、兜、刀から手っ甲、脚絆、わらじ、鬼の角に至る迄ボール紙に銀紙をはったり、木をけづったり、家から家族の古い着物を持って来たりして本当の手作りでこしらえて下さった。初めは会場も古い方は懐しく覚えておいでの、大きな戸でくぎってあったお教室を全部開けはなして大きな講堂にして行われたが、後には青山の青年会館（神宮外

にある日本青年館ではなく現在は無い)で本格的なライトや幕を使って行われた。先生はやはり生徒をよく見ていらっしやと今でも時々思い出して感心しているのだが、桃太郎が征伐に行く鬼ヶ島で鬼共が氣勢を上げて大合唱する所があった。その合唱の出が伴奏なしで途中からピアノが入って来るという訳で余程官程の良いリーダーが必要であった。鬼の大將を演ったのは後年上野(現在の芸大)へ進み今は音大の教授をしている中村泉子さんである。又先生に犬の役をおぼせつかった五十嵐静子さんは現在もベテランのピアノの先生として幾多の優秀な弟子を世に出している人であり、村人の長を演った千野幸子さんは、後に宝塚へ進み、桜町公子と有名をはせた人である。桃太郎をやらせていたといいた私だけが全く音楽的な所がなく東洋英和では後にも先にも唯一人といっていくかも知れない水泳選手として一寸鳴らしたのが変わっているかも知れない。もっとも運動神経の方は自信があったから鬼との立廻りには良かったのかも知れない。その後私が6年の時受持の榎村先生の演出で「後の桃太郎」というのを演った。前のいんねんで又私が桃太郎になったが、これは龍宮城へも行くという変わった話であった。榎村先生はモダンバレエの振付等のお上手な方で、乙姫様の催す桃太郎一行の歓迎の宴などではクラス総

出の鯛や鮓のおどりが青や赤のライトに照らされて大変好評であった。お客はみんな父兄や知人であるからどの場面でも大変な拍手で演っている我々は気持ち良かった。何時思い出しても笑ってしまう事。それは私達の文芸会の切符が、当時の大歌舞伎の値段と変りなかった事で父兄も卒業生もそれをハイハイと心良く沢山買って下さっているも大入り満員、補助席が出た程である。もっと傑作な事は出演者も切符を持たないと入れなかった事。今の口うるさい子供達なら何んて云うかしらと思うと、当り前のように切符を手に入れたから入って行った私達の姿が浮んで来る。現在東光会の百周年の募金委員をしていて中々集まらないので苦勞しているこの頃なので、この前の校舎建設の為の募金や文芸会の切符の売行がスムーズに行った事を思うと時代のうつり変りを感じる。東洋英和の校風は、本当に家族的で、上下の開きが相当あっても、又どこで一諸になっても、直ぐ10年来のお友達のように親しくなれる特徴がある。私が副会長をしている時地方の同窓会などにも顔を出した事があるが実になごやかで良い雰囲気であつた。バザーや東光会の会合で大先輩にお会いしたりすると「あなた桃太郎さんでしょ？」などと、本年64才の私の肩をたいて下さる方がある。東洋英和は本当に良いなあといつも思う。

文芸会 - 聖劇部と私

賀原夏子

どう云う訳か、私は抜群に記憶力が悪い。これは私のコンプレックスのなせる業か！兎に角過去の事は全て恥じていて、なるべくなら思い出したくない、と潜在的に思っているせいかも知れないそれに記憶と云うものもまことに身勝手なもので

自分に都合のいい事だけを覚えていたい、記憶のあやまりも"思い込んだら命がけ"でけして正そうとしないものだ。だから年寄りの昔話しと云うのも、けして全てが本当とは思われない。かなり偉い人にして然りなのだから、まして私の昔話し

においておやである。どうぞ間違っていたら御勘弁下さい。あゝそれからもう一つ。

私は子供の頃から数学に弱い。今が昭和何年なのかもさだかでない。いや年号どころか自分の年令も忘れてしまう。いゝ加減に答えると、まるで年令をごまかしている様に思われはなはだ心外なので、他人様に才を聞かれると私は何時も「ハイ、大正10年生れです」と答える事にしている。思えば東洋英和の編集部も、随分とんでもない人に原稿を依頼したものだ。お気の毒に！

そんな訳で私が小学校に入ったのは、さて何年だったか？どうか皆様計算してお読み下さいませ。あゝ忘れてました。私は早生れでした。

兎に角私が小学校に入ってすぐだった、木造の旧校舎のお教室に、いともふくよかな、いともこやかな先生がお見えになった。始めて見る顔だった。そういえば他の先生方は袴をはいていらっしやるのに、その先生は高々と帯を巻いていらっしやる。何か特別な先生なのだ、と子供心に思ったものだ。「皆さん！私はお芝居の先生です」私はびっくりした、学校でお芝居を教えるなんて！「今度私達で『ピヨコ太郎』と云うとても面白いお芝居をやります。でも学校ではお芝居と云わずに『劇』と云いましょうね。そしてその劇には1年生の皆さんにも何人か出ていただきたいのですが、出たい方は手を上げて下さい」

何と！今で云うオーディションなのである。その先生は、これ以上にこやかな顔はないと云う様に満面笑みをたゝえて皆を見廻した。その方こそ、今村先生なのである。

あのニッコリが消えたら、どんな顔になるのかな？ そんな事を考えながらも私は誰よりも早くさっと手を上げた。確か隣に座っていた鈴木仁子さん（池田仁子さん）をさそった様に覚えている。ついでながら申し上げておく。反抗期に明け

暮れていた私の小学校から女学校卒業までの歴史の中で、こんなにすらっと素直に手を上げたのはこれが最初の最後であった。『ピヨコ太郎』の主役は2年上級の千野さん。（その後宝塚にお入りになって桜町きみ子さんになられた方である）世の中には何て綺麗な、何てかわいゝ子供がいるもんだらうと私は感心した。やっぱりスターと云うものは美人でなければ駄目なのか！ とその時思ったかどうか、それはわからない……さて私達は……と云うとカエルのその他大勢。

かえる ひとひよこ

ふたひよこ みひよこ

よひよこ いつひよこ

むひよこ ひよこ

今にして思えばアゝさすがは英和。立派なミュージカルであったのだ。勿論筋などは覚えていないが、大豪華キャストの大ドラマであった事は確かである。

私のあやしげな記憶で話は前後するかも知れないが、その他にも上級生がヒゲを付けて、モーゼになったり、それが馬鹿に似合っただけ見えたり、又は三人の博士やマリヤ様や……と云う様にいわゆる『聖劇』なるものをよく見せられたものだ。クリスマス頃には青山の青年館でやった事もあるし、気の毒な子供達の為に下町に聖劇をやりに行った記憶もある。

それがどう云う訳か少しづつ少くなり、ついには学校の劇は消えてしまった。そして今村先生は山田先生にお名前が変り、英語を教える様におなりになっていた。恐らく時代のせいもあったのだろう。芝居に熱中しすぎるとどこやらかで、ひんしゅくをかった……と云う話もちらほら聞いた。

そして聖劇部はかげをひそめ、私も芝居などすっかり忘れていた。

丁度私が女学校3年の頃だったであろうか、ク

ラスで一番出来の悪いスケバンの私のところに、クラスで一番出来のいい級長の若尾さん（かの有名な三枝子女史）がやって来て、芝居をしないか？と云う。聖劇部に入って、聖劇でない普通の芝居をやろうじゃないかと云うのである。私は実のところ私があまりに暴力的生徒だったので先生が手を焼いて一計を案じ、密かに優等生の若尾さんを差し向けたのかと思ったが、そんな事より好きな芝居をやれると云う事が魅力だった私はすぐにOKをした。

その頃の聖劇部はほんの名ばかり、大人しい上級生が2・3人ひっそり居るだけだった。若尾さんと私はクラスの中から目ぼしい数人を引っぱり出し、早速聖劇部になぐり込みをかけた。講堂の後の楽屋とおぼしき聖劇部の部屋に入ってみて私は驚いた。机の引き出しの中には、ドーランが、ひと通りそろっているではないか！昔、今村先生の御指導のもとに華々しく公演をしていた聖劇部の名残りであろう。衣裳やカーテン類もかなりあった。そしてトンカチも。私と若尾さんは早速上演台本をさがしにライブラリーにかけつけた。

「ベニスの商人」「修禅寺物語」「屋上の狂人」狂言の「三人かたわ」等々…。さあ忙しくなってきた。私は時間を無駄にせず、授業中に本直しを始めた。試験の答案紙には名前だけ書いて、白紙のまま横に置き、偉大なるシェイクスピアを3分の1に縮めるべく腕を振った。

配役は話し合いできめた。「ベニスの商人」で若尾さんがポーシャをやると云えば私はシャイロックに廻り、斉藤直子嬢がやゝ女らしいと云う事でネリッサの役にきまった。その代り「修禅寺物語」では夜叉王は若尾さん、かえでの役が私、と云った具合。その他遠藤徳子さん、神崎千鶴子さん、鈴木みな子さん…きら星のごとき配役だった。

私達は段々にエスカレートしていった。当時そ

の名も高い「新協」「新築地」と云う新劇の二大劇団が築地小劇場で次々に名作を産んでいた。私達は勉強の為と云って、その築地小劇場によく通ったものだ。私達は興奮し熱狂し、テープこそ投げなかったけれど、図々しくも楽屋におしかけていって、メイクアップを見せてもらったりしたものだ。

ついに私達のエスカレートは頂点に達した。新築地で上演されて大あたりを取った長塚節の「土」を我々でやろうと云う事になったのである。私が山本安江さんの役「おつう」「若尾さんが薄田研二氏のやったお父さん役。稽古も進み、講堂に農村の家のセットも作った。誰のつてだったか覚えていないが、なぜか、かつら屋さんまでが英和にかつら合せてやって来た。これはヤバイ！皆もそう思っていた。案の定担任の三上かほる先生、新井竹先生が稽古たけなわの私達の前にあらわれ、上演中止が申し渡された。すざまじい顔で腕組みしている私達を見て、三上先生は涙を一ばい留めていらっしやる。もういけません。私達はカッカと怒りながらも、それでもカッコよく上演をあきらめた。

そんなことでちょいとしたスターになった私はなぜか下級生達からサインを求められ、よく覚えてはいないが「おつう」が泣いた日、日本の文化は終わった「みたいな言葉を書いてイキがった。

かくて聖劇部は私達の卒業と共に太平洋戦争の中に消えていった。

あれから気の速くなる様な才月が流れた。

—あ と が き—

文芸会を特集しました。

当時をしる、貴重な楽しい資料をお寄せくださいました四氏の方々に厚く御礼申し上げます。

（竹井 張替）